

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32675
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2017～2022
課題番号：16KK0038
研究課題名（和文）極小主義プログラム検証：「併合」「転送」の仕組みの解明及び「パラメタ」の再考（国際共同研究強化）
研究課題名（英文）Examining the Minimalist Program: Merge, Transfer and Parameters (Fostering Joint International Research)
研究代表者
小畑 美貴 (Obata, Miki)
法政大学・生命科学部・准教授
研究者番号：80581694
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,600,000円
渡航期間： 12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトでは、人間言語の構造構築に観察される依存関係の1つである「一致関係」に関して中心に取り組んだ。特に、カーボ・ベルデ語の焦点化一致現象に注目し、WH疑問文及び感嘆文において、同一主要部(C)によりそれぞれ異なるタイプの一致関係が構築されることを中心に検討し、同様の現象がアラビア語等の主語・動詞の一致現象においても観察されることを示した。更に、一致関係の構築によって決定される「ラベル」が、意味や音声のインターフェイスにおいてどのような役割を担い、どのような解釈を受けるのか、構造構築のメカニズムだけでなく、構造、意味、音の関係性についても研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、人間言語の構造構築の仕組みの解明を目指し、特に一致関係の構築に関して研究を行った。未だ多くの部分が未解明である人間の「言語能力」の仕組みの一端を、この研究によって明らかにすることが出来たことは、言語理論の進展に貢献できるものであると考えられる。また、本研究では、カーボ・ベルデ語の言語データを多く収集し、研究に使用している。カーボ・ベルデ語は話者が少なく、まだあまり研究のされていない言語である為、希少性が高いと言える。本研究は基礎的研究であるが、人間言語の仕組みが解明されれば、言語教育や言語障害などの分野への応用が期待できるという点で、社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research project pursues some issues of agreement relation, which is a kind of dependencies observed in structure-building of human language. As a case study, we mainly focus on agreement relation constructed in wh-questions and exclamative sentences in Carbo Verde Creole, in which a single head C agrees with each of the focus elements differently. Also, our analysis can be extended to Subject-Verb agreement phenomena in an Arabic language, and we demonstrate that the same type of agreement takes place in this language, which enable us to see commonality between Carbo Verge Creole and an Arabic language. Moreover, we also consider how labels determined through agreement play their roles and are interpreted at the sensory motor (SM) interface and the conceptual-intentional (CI) interface.

研究分野：英語学

キーワード：一致関係 カーボ・ベルデ語 ラベル 生成文法

1. 研究開始当初の背景

国際共同研究加速基金の元となっている若手研究(B)では、ヒトの言語における「文構造構築の仕組み」の解明に取り組んでいた。日頃無意識に使用している母語だが、実は1つの文を発話する為に、脳は文生成の為に非常に複雑な文法の計算・操作を、瞬時にかつ正確に行う必要がある。母語に関してヒトが持っているこのような「言語能力」はどのような仕組みをしているのか、この謎を解明すべく主に以下の2点の研究を行っていた。①言語要素を結合し文を構築する「併合(Merge)」、併合によって構築された統語表示を音声・意味部門へと送り出す「転送(Transfer)」という2つの統語操作の適用メカニズムを明らかにする、②どの言語にも普遍的に適用される「併合」「転送」が、個別言語間差異をどのように捉えるのか、多様な言語データ、特にカーボヴェルデクレオール(以下CVC)等の言語データを収集し検証する。

以上の2点に関して研究を行い、研究成果として招待講演や学会発表、論文出版を行っており、進捗状況は良好であった。①に関しては、併合操作によって作り出される統語的構築物(syntactic object)が転送操作の適用を受ける際に、「弱い」転送(weak Transfer)を適用することで統語部門内に統語表示を残存させる必要があることを、付加詞の派生を検証することで示した。更に、併合により構築された構築物へ対して付与されると考えられる「ラベル(=構築物の性質を示すもの)(Chomsky 2013)」が、転送によって送られる意味・音声部門における解釈にどのように関わっているか、研究を行った。特に意味部門において、「ラベルの有無が統語的構築物の意味解釈の必要性を決定する」ことを、ドイツ語及び日本語の移動現象に基づき主張した。また、2015年11月には日本英語学会内でシンポジウム「Unconstrained Merge: Its Consequences and Challenges」を開催し、申請者が企画・責任者を務め、若手研究Bによって海外から研究者を招聘した。②に関しては、Chomsky(2005 他)における「極小主義アプローチ」の下で、個別言語間の違いをどのようにして捉えるかは大きな問題となっているが、本研究では統語操作の「適用順序」の差によって説明可能であると主張した。使用した言語データは(まだ研究がほとんどされていない言語である)CVCの母語話者から収集したものを主に使用し、この点でも希少価値の高い研究と考えられる。

若手研究(B)による以上の研究を踏まえた上で、国際共同研究加速基金では、更に「広い視野」に立ち、構造構築のみではなく、作られた構造がどのように意味解釈や音の解釈を受けるのか、研究を行うことを計画した。また、CVCの母語話者と直接会い、より多くのデータ収集を行うことを計画した。

2. 研究の目的

若手研究(B)の成果を踏まえた上で、以下の2点を軸として国際共同研究を行った。①人間言語の構造構築に不可欠と考えられている複数の統語操作(併合、転送を含む)や原理は、構造構築以外の領域、例えば意味や音声の領域、或いは言語システム以外の領域においても普遍的に機能するものであるか、多角的検証を行う。②言語システムがどのように個別言語間差異を捉えているか、特にCVCの更なるデータ収集及び記述を行うことで、より幅広い言語データに基づき検証を行い、そのメカニズムの解明を目指す。

①に関して若手研究(B)では、「転送」「併合」という統語操作に特に注目し、構造構築のメカニズムの解明という「狭い」視点での研究を行っている。この基礎研究を発展させ、特定の統語操作や原理が果たして意味解釈や、音韻形態的な解釈、更には他の認知システムにも共通のものなのか、「広い」視点での研究を行う。Chomsky(2005)では、人間言語を構成していると考えられる要素の中で、言語システムにのみ固有の操作や原理は、非常に限られていることが示唆されている。これは、言語進化の観点からも支持される(Hornstein 2008 他)。この可能性を検証するには、言語の構造構築という枠内での研究では不十分であり、構造構築と深く関わるその他の領域へ目を向ける必要がある。もし特定の統語操作や原理が、他の認知システムでも同様に働いているなら、言語システムにのみ固有の要素の数を減らすことができ、言語進化の観点からも支持を得ることができる。

②に関して若手研究(B)では、主に「併合」「転送」という統語操作適用の観点から、個別言語間差異をどのように捉えられるか研究を行っている。その際に使用した言語データには、CVC母語話者から収集したデータが多くあり、特にCVCのWH疑問文に関して研究を行っている。この研究を更に発展させる為に、まず収集データの幅を広げる必要がある。第一段階として、CVCのその他の言語現象、特に時制、相、補文化辞などの接辞とその一致関係を中心に新たに言語データを収集した後に、同じく多くの接辞をもつ日本語との比較、及びCVCの基層語でもあるポルトガル語との比較等を行うことで、それらの接辞の生起メカニズムを記述することを目指す。第二段階として、この記述研究に基づき、個別言語間差異が、言語システム内でどのように捉えられるか、特に、言語以外の認知システムにも同様に働くと考えられる操作や原理に訴えることでの説明を目指す。

3. 研究の方法

理論的研究に関しては、過去の関連する文献を読み、批判的に検討することで、更なる考察や裏付けが必要な部分を見つけ出す。この際、共同研究者と議論を重ねることで、研究の方向性を決定する。その後、必要な言語データの収集を行う。収集方法は、過去の文献を精査したり、当該言語の母語話者から直接データを収集したりする。特に、カーボ・ベルデ語等は、文献が少ない為、母語話者と話しながら、文を作成し、データの収集を行う。収集したデータを用いて、自身の提案の裏付けを行うことで、研究を進めて行く。

4. 研究成果

このプロジェクトでは、2019年度の1年間を、ミシガン大学アナーバー校にて過ごし、現地の研究者達と共同研究を行った。まず渡米前には、共同研究の前段階として、主にこれまでの自身の研究を整理することで、共同研究へ向けての準備を行った。具体的には、2017年度は、Korean Association of Language Sciences (KALS)での招待講演を行った。この講演において、言語固有と考えられてきた一部の原理や統語操作が、実際には言語固有のものではなく「第三要因」と言われる言語以外のシステムにも共通のものと考えられるようになったことを踏まえ、第三要因に属すると考えられる最小探査(minimal search)の一部であるラベル付けの問題を取り上げた。Chomsky (2013)のラベル付けアルゴリズムの問題点を指摘し、主に日本語の長距離スクランプリングに関する考察を発表した。2018年度は、慶應義塾大学言語学コロキウムにおいて招待講演を行い、人間言語の多様性をとらえるメカニズムの構築には、統語操作の「適用順序」を考慮する必要があり、単一の言語システムから多様なアウトプットを出力出来る可能性があることを主張した。更に、このシステムをさらに発展させることで、アラビア語の一致現象における非対称性を説明可能であることを示した。

2019年度は、米国に1年間滞在し、ミシガン大学アナーバー校にて研究を行った。同大学のMarlyse Baptista教授と主に共同研究を行い、カーボ・ベルデ語のデータ収集及びその理論的分析を行った。主要な研究成果としては、第一に、カーボ・ベルデ語の形容詞と日本語形容詞を比較し、その共通性を捉えた。本研究の元となっているObata and Morita (2019)の口頭発表に新たな言語データを追加し、言語の多様性をどのように捉えるべきか、またカーボ・ベルデ語の形容詞は、英語や日本語等と比較した際に、どのようなパラメーターの値を選択しているのか等の理論的問題を議論することで、その研究内容を発展させた。第二に、カーボ・ベルデ語の感嘆文に関してデータを収集し、アラビア語やフランス語などにおいて観察される非対称的一致関係と同様の関係がカーボ・ベルデ語の感嘆文においても観察されることを示した。この研究は、Obata and Baptista (2020)として国際学会において発表を行った。その他、カーボ・ベルデ語のデータの確認や新たなデータの収集などに積極的に取り組むことが出来た。

2020年度は主に以下の2点に関して研究を行った。第一に、2019年度にMarlyse Baptista教授と行ったカーボ・ベルデ語の一致現象に関する研究の成果を、国際学会プロシーディングスにおいて出版した。2019年度に口頭発表を行い、2020年度に論文を出版したわけだが、口頭発表で頂いたコメントなどに基づき、加筆修正を行った。また、この論文を更に発展させ、今後は国際学術誌への投稿を目指しており、現在も作業を進めているところである。第二に、2019年1月に国際学会で発表したObata and Morita (2019)の形容詞に関する研究を更に発展させる為に、Marlyse Baptista教授にも加わって頂き、カーボ・ベルデ語の形容詞のデータ収集を行った。日本語との共通性に注目し、形容詞と修飾を受ける名詞との間に一致関係がみられるというObata and Moritaの主張を更に多くのデータにより裏付けるに至った。

2021年度は主にObata and Baptista (2020)の研究内容を発展させ、論文投稿へ向けて準備を進めた。当該論文では、カーボ・ベルデ語における疑問文と感嘆文の一致関係に注目し、カーボ・ベルデ語では補文標識Cが2方向に一致関係を構築することを示した。この研究を更に発展させ、形容詞の一致関係との類似性に関して検討を行った。カーボ・ベルデ語では、Obata and Morita (2019)において指摘したように、形容詞においても2方向の一致関係が確認される。両現象が同じメカニズムに従うものなのか、またその他の言語現象においても同様の振る舞いが観察されるのか等、新たなデータ収集を行った。現在も研究を継続中である。更に、上記研究と関連して、英語における動詞連結go get構文の研究を行った。動詞連結においてどのように動詞間の一致関係が構築され、結果、どのようなラベル付けが行われるのか、更にそのラベルがSMインターフェイス側においてどのように解釈を受けるのか、を中心に研究を行った。この研究成果は、Sugimura and Obata (2021)として日本英語学会シンポジウムにて発表を行った。

2022年度は主に以下の3点の研究を行った。第一に、Obata and Baptista (2020)におけるカーボ・ベルデ語の一致関係に関する論文を更に発展させ、2方向に一致関係を構築するメカニズムが、言語理論へ対してどのようなことを示唆するのか、検討した。一致の方向によって生じる意味解釈の差に注目し、カーボ・ベルデ語の形容詞や、分裂文などのデータ収集を行い、観察及び分析を行った。現在も継続して研究を行っている。第二に、2021年に日本英語学会シンポジウムにて発表を行ったSugimura and Obata (2021)の研究内容を更に発展させ、論文にまとめた。2021年の研究では主に英語のgo-get構文に関して研究を行ったが、日本語の複合語「乗り

降り（する）」のようなタイプについても同様の分析が当てはまることを論じた。本論文は、学会誌 *Studies in Generative Grammar* への掲載が決定し、現在出版に向けての作業中である。第三に、人間言語の表示を構築する際に「転送(Transfer)」及び「ラベル付け(labeling)」という操作が行われるが、これらの用語説明を執筆することで、本プロジェクトの成果の一部を社会へ還元することを目指した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Obata, M. and M. Baptista	4. 巻 38
2. 論文標題 Asymmetrical Agreement: Evidence from Focus-Agreement in Cape Verdean Creole.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics 38	6. 最初と最後の頁 315-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Epstein, S. D., M. Obata and T. D. Seely	4. 巻 41
2. 論文標題 Is Linguistic Variation Entirely Linguistic?	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Linguistic Analysis	6. 最初と最後の頁 481-516
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Obata, M.	4. 巻 -
2. 論文標題 Syntax and its Interface: How are Labels Determined?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the Korean Association of Language Sciences 2018 Winter Conference	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 杉村美奈 小畑美貴
2. 発表標題 ラベルと形態素の具現化の関係 動詞連結を中心に
3. 学会等名 日本英語学会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Obata, M. and M. Baptista
2. 発表標題 Asymmetrical Agreement: Evidence from Focus-Agreement in Cape Verdean Creole
3. 学会等名 West Coast Conference on Formal Linguistics 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Obata, M. and C. Morita
2. 発表標題 Three Types of Adjectives in Japanese: A View from Cape Verdean Creole
3. 学会等名 The Society for Pidgin and Creole Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Obata, M.
2. 発表標題 Reconsidering Parameters: Problems and Alternatives
3. 学会等名 Keio Linguistics Colloquium (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miki Obata
2. 発表標題 Syntax and its Interface: How are Labels Determined?
3. 学会等名 The Korean Association of Language Sciences 2018 Winter Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	パプティスタ マリース (Baptista Marlyse)	ミシガン大学アナーバー校・Department of Linguistics・Professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ミシガン大学アナーバー校			
米国	イースタン・ミシガン大学			